

■ 「さようなら」の作法 ■

世界の別れの言葉は、一般に3つに大別される。「神の身許によくあれかし(Good-bye)」か、「また会いましょう(See you again)」か、「お元気で(Farewell)」。ところが、日本語の「さようなら」はいずれにも属さない。

その語源は、「然らば(しからば、さらば)」、「左様ならば」という接続詞にまで遡る。それまでの時間を共にしていた人に、区切りを付ける役目を持つ。10世紀の昔から、別れに際して日本人は「あなた(たち)との時間はここで区切ります」と宣言し、一呼吸置いてその先へ進んできた。

今ではそのような意味を込めて「さらば」と言ったり、「さようなら」と挨拶したりする人はいない。そう思っていたら、どっこい現代人だって使っていると知った。「(それ)じゃあ(ね)」「(それ)では」なんて、「左様ならば」と同じ使い方だ。「さようなら」の意味は知らずとも、別れに対峙する日本人としての精神は受け継がれていた。

ほとんどの別れが日々のちょっとしたものだが、失恋や死別のように、世の中には望まない別れもある。そのような、自分ではどうにもならないこと、不可避な事態にも、日本人は、「左様であるならば」と感情を静かに抑え、事実を受け入れ、心に区切りを付け、そしてそれ以上は何も語らず別れてきた。映画『あなたへ』で描かれた、妻から夫に託された手紙のように。

このような「サヨナラ」の作法について、作家のアン・リンドバーグ(世界初ニューヨーク・パリ間の大西洋単独無着陸飛行に成功したチャールズ・リンドバーグの妻)が、『翼よ、北に』の中で書いている。

「サヨナラ」ほど美しい別れの言葉を知らない。Till we meeting againのように、別れの痛みを再会の希望によって紛らわそうという試みを「サヨナラ」はしない。目をしばたいたいて涙を健気に抑えて告げる Farewell のように、別離の味わいを避けてもいない。

「サヨナラ」は言い過ぎもしなければ、言い足りなくもない。それは事実をあるがままに受け入れている。秘かに燻っているものを含めて、全ての感情がそのうちに埋み火のようにこもっているが、それ自体は何も語らない。言葉にしない Good-bye であり、心を込めて手を握る温かさである。

望まない別れはいつも突然やってくる。この度の異動により本校を去ることになった。日本の作法に従い、すべて感情を抑えて「さようなら」とだけ言って別れようと考えていたが、どうしてもひと言だけ加えたい。「生徒・教職員の皆さん、どうかすばらしい野々市明倫高校であり続けてください。さようなら」。

参考：『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』【竹内整一】